

巻 頭 言

院長 中 川 洋

市立病院医学雑誌、第 22 号が刊行される運びとなりました。一時休刊していたものが昭和 55 年 7 月 1 日付け、病院が清水小路に移転した日に合わせて復刊されたと聞いています。平成 12 年度は初めて年間患者数が 50 万人を突破し、今年度も外来患者数は昨年度を上回る勢いであります。大変に多忙な日常診療のなかで、編集に携わった編集委員各位、論文投稿された皆様のご苦勞に感謝申し上げます。

今回は 27 編の原著・症例報告が寄せられており、論文掲載数として過去最多でありました。日常診療に、救急センター診療にと明け暮れる中で、多くの研修医・レジデント諸君が著書、あるいは共同研究者として記載されていることは喜びに耐えません。限られた時間、限られた症例の中から論文としてまとめ上げる努力をすることにより、経験をより確かで、実にあるものにすることが可能となります。論文作成のご指導を頂いた各科指導医の先生方にも感謝を申し上げたいと思います。

さて、平成 16 年 4 月から医師の卒後臨床研修が必修化されることになり、当院にも大きな影響が予想されます。昭和 57 年に厚生省（当時）の卒後臨床研修病院指定を受けて以来、これまでに 140 名を超える若い医師が研修を終え、巣立って行きました。戦後のインターン制度は昭和 43 年に廃止され、その後 34 年間もの間、卒後研修は単に努力目標とされたまま、専門医指向の強い研修が行われて参りました。しかし、近年プライマリーケアの充実、全人的医療の重要性が叫ばれ、昨年秋の国会で卒後臨床研修必須化が決定したものであります。新しい制度は厚労省の医道審議会・医師臨床研修検討部会で現在最後の詰めが行われています。ローテーションを基本とした研修プログラムが予想され、当院の研修システムにも大きな変更を迫ることになりそうです。次回 23 号が刊行される頃には、新しい必須研修プログラムによる研修医募集をすることになっているでしょう。

医学雑誌の最後のページには剖検記録と CPC、各種病理カンファランスの記録等が掲載されています。各種のカンファランスは年間を通して頻繁に開催されていますが、このことは病院の診療の質を担保するとともに、活性度を示す良い指標であります。日夜診療に追われるなかで、スタッフの皆さんが地道に自己研鑽に励んでおられることを誇らしく思っています。これまで研修病院指定を受ける際に、最も難しいハードルが剖検数・剖検率でありました。近年は疾病構造の変化、画像診断、各種診断法の進歩等に伴い、どこの病院でもこの条件をクリアすることは困難な状況が続いていました。剖検の重要さはこれからも変わることはありませんが、必須化後は同時に CPC、病理カンファランス等の活動が大きく評価される方向となり、より実態に即した病院の評価がなされるようになっていくでしょう。

仙台市立病院医学雑誌が今後とも研修成果を示す論文で飾られることを祈念し、「教育のない病院は一流といえない、また発展もない」というウィリアム・オスラーの言葉を添えて巻頭言といたします。